

220-pm14

大和芍薬の潜在的資源探査と応用：耕作放棄地再生への取組

○高橋 京子^{1,2}, 矢野 孝喜³, 川嶋 浩樹³, 善利 佑記¹, 高浦 佳代子^{1,2}, 後藤 一寿³ (1) 阪大院薬, (2) 阪大博, (3) 農研機構)

【背景・目的】生薬原料として需要の大きいシャクヤク (*Paeonia lactiflora* Pallas, PAEONIAE RADIX) は、耕作放棄地の多い中山間地域の活性化を図る候補として期待されている。本研究では、伝統的薬用芍薬について日本古来の篤農技術や品種・系統の現況及び形態比較調査に基づき、医薬品原料品質の担保と採算性が見込める技術開発を耕作放棄地で検討している。【方法】シャクヤクの伝統的知見に立脚した薬用適合品種選定には、近現代の本草・農業関連文書 203 件(1633-2016 年)の悉皆調査及び薬種関連企業各社の協力を得た。栽培試験は大分県竹田市(標高約 700m)で、ハウスによるシイタケ栽培が行われていたが、放棄後 3 年が経過していた。【結果・考察】畿内古文書・図譜の解析及び取材調査より、江戸期に徳川吉宗が展開した薬草政策以降国内で育種された大和芍薬(通称)のルーツを検証した結果、現在実地臨床で汎用される「梵天(白花八重)」と異なる複数の系統種を確認した。その中には森野藤助賽郭写真「松山本草(森野旧薬園蔵)」に描かれた赤花一重の品種も存在した。芍薬の栽培・加工方法の検証結果、江戸期に切り花利用された記述が認められ、現代の栽培においても応用可能であることを確認した。*P. lactiflora* は ITS 領域の遺伝子配列の類似性で 2 つの subclade WPR・RPR に分類される。臨床使用される中国産白芍の遺伝子型は梵天・北宰相と同じ WPR 型、同中国産赤芍は RPR 型で、内蒙古野生種は RPR 型であった。遺伝子型や指標成分バランスより 4 品種(梵天、中国系、和芍系、園芸種)を試験栽培種とした。耕作放棄地での作業は 2016 年 11 月に開始し、計 480 検体を定植した。2018 年 5 月の生育調査時に中国系で複数種の形態を有する花が確認されており、系統の詳細解析が必要である。現在、実証モデルとして定植 4 年後の収穫に向けて検証中である。